

長ぐつの話

小川未明

青空文庫

あるところに、かわいいそうな乞食の子がありました。

さびしい村の方から、毎日、町の方へ、ものをもらいに追い出されました。けれど、小さな足には、なにもはくものがなかったのです。子供は跣足で、長い石ころの多い道をとぼとぼと歩かなければならなかったのです。

夏の暑い日のことであります。地の面は乾いて、石は、熱く焼けていました。しかし子供は、足になにもはくものがなかったのです、その上を跣足で歩いていました。通りすがりの人たちは、このかわいそうな乞食の子を見ましても、やさしい声ひとつ、かけてくれるものはありませんでした。

乞食の子は、きたならしいふうをして、だれも通らない、日盛りごろを往來の上を歩いていました。すると、頭の上で、つばめが鳴いていました。電信柱が往來に沿って、あちらまで遠くつづいていました。そして、その先は、青い、青い、空の下に見えなくなっていました。

その柱と柱の間には、幾筋かの電線がつながっていました。そして、その細い電線は日にさらされて光っていました。

つばめは、幾羽となく並んで、電線に止まっています。そして、鳴いていました。乞食の子は、ふと思わず立ち止まって上を仰ぎますと、つばめは、みんな自分を見て鳴いていましたので、これは、鳥までが、自分をばかにするのかと腹をたてました。

子供は、足もとの小石を拾って、鳥らに向かつて投げました。つばめは、驚いて、みんな一時に飛び立ちました。子供は、しばらくたたずんで、つばめの飛び立つ方をながめていました。

翌日も、また熱い日でありました。子供がちようど、昨日石を拾って投げつけたころにききますと、またもつばめがたくさん電線の上に止まって、鳴いていました。今度は、すこし道から離れた田の上で鳴いていました。ちようどその下には汽車の線路があつて、土手がつづいていました。土手は、ここでは往來に接していましたが、やがて道から遠く離れて、あちらへいつていたのです。

子供は石を拾って、わざわざ線路の方まで、田のあぜ道を伝わってゆきました。そして、石をつばめに向かつて投げようと思つたのです。

けれど、子供は、つばめの鳴いているのは、自分をばかにして鳴くのでないということを感じました。

その声は、なにかしきりに、自分に向かつて、告げようとしているようです。子供は、つばめが止まっている、下の線路のそばを見ました。すると、そこには、はき古した、ぼろぼろに破れた長ぐつが一足捨ててありました。

子供は、「これだ！ つばめが、俺に、くつの落ちていることを知らしてくれたのだ。」と、深く心に感謝しました。

子供は、さつそく、その長ぐつを拾ってはいたのであります。それは、多分、工夫かだれかがはいて、もう古くなって破れたので捨てたものと思われまます。

大人の足にはいた、長ぐつでありましたから、乞食の子供がはくと、足の全部が、うずまつてしまいそうにみえました。しかし、なにもはかずに、この焼けるような石塊の多い道を歩くよりは、どんなに子供にとつて、くつをはくことがよかつたかしれません。そればかりでなく、子供は、生まれてから、はじめてくつというものをはいたので、珍しくてしかたがありませんでした。

大きなくつを、ひきずるように、往來を町の方に向かつて歩いてゆきました。

町の人々は、みんなこの子供のようすを見て振り返りました。しかし、笑うものは少なくなつたのです。

「どうせ、乞食の子だもの。」と思つていたので、かわいそうとも、おかしいとも問題にしなかつたほど、冷淡でありました。

しかし、田舎道を通ると、村の子供らは手をたたいて笑いました。

「やあい、このお天気に、長ぐつなんかはいているやあい。」と叫びました。そして、ぞろぞろ後からついてきて、笑つたり、また石を投げたりしました。

乞食の子は、しくしく泣きだしました。町へいつて、みんなに冷淡にされているほうが、まだよかつたように思いました。

きたならしいふうをして、長ぐつをはいた子供は、やつと逃れて村の子供らのついでこない小川の辺までやつてきて、そこに立つてしばらく泣いていました。

このいじらしい姿を見たものは、ほかにだれもありません。ただ、田の中に遊んでいたかえるらばかりでありました。

かえるらは、かわいそうな子供のために相談したのです。

「どうか、村の子供らが、子供を見ても笑わないようにしてやりたいものだ……。」

こういつて、いろいろ話し合いましたが、ついに、雨を降らせるにかぎるということに考えつきました。

ほんとうに、よく空は晴れわたっていて、一片の雲すらなく、雨が降りそうなけはいはなかつたのです。それをどうかして、雨を降らせようと、かえるらは思ったのであります。たくさんなかえるは、田の中や、あぜの上で、空に向かつて鳴きはじめました。また、あるものは、小さな木に上つて、すこしでも大きく、太陽の耳に訴えがきこえるように、鳴きたてたのであります。

晩方まで、根気よくかえるらは鳴いていました。すると、いままで見えなかつた雲の影が空に動きはじめました。そして、日の光が、だんだん蔭つてくると、その日の夜から翌日にかけて、大雨が降り続きました。

やがて、雨は晴れました。けれど、田舎道には、水がいつぱいたまっています。その日、乞食の子は、長ぐつをはいてみんなの前を威張つて通ることができました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「時事新報」

1923（大正12）年8月26日

※表題は底本では、「長《なが》ぐつの話《はなし》」となっています。

※初出時の表題は「長靴の話」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2014年4月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

長ぐつの話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>